

講義・「ASDの子どもに社会的なかかわりを教える」「生涯を通じた人とのかかわり」からの考察

講師：カイア・メイツ

キャシー・ハーシー

ノースカロライナ大学TEACCH部セラピスト

1 共同療育者として親は欠かせない

TEACCHに基づく支援では、「好子」が大きな役割を持つ。この好子を良く知っているのは、身近な家族であり、中でも親であるといえる。そこからの情報なしでは、支援のためのトレーニングが成立しないことを支援者は心得ておくことである。

2 TEACCH 早期介入サービス

①家庭における親の TEACCHing セッション

②親のための個別セッション

③親のためのグループセッション

④親のための支援グループ

以上の方法で、親に向けたセッションにより、支援者は親を共同療育者として迎える。

3 ASD の子どもの学習スタイル

それぞれの子ども達が抱える「得手」「不得手」を考慮し、学習スタイルを整えていく。それを進めるためには、親の存在が欠かせないことに気づくはず。指導においては、TEACCH に基づき、構造化やルーティンが必要となる。

(1) 物理的構造化

まず、物理的構造化の目的は、「自分に期待されていることを明確にすること」にある。裏を返せば、「支援者（先生）が、あなたに期待しているものは、何か」ということを伝えるということである。そのためには、「何が、どこで、どうなるか」を伝えるという視点で組み立てること。

(2) アクティビティーシステム

次の4点の質問によるマンツーマン指導。

①私は何をやるの？

②どれくらい？

③いつ終わるの？

④次に何が起きるの？

人とのかかわりを持つことの理解が難しいASDの子ども達にとって、「関わりを持つこ

と」「開始すること」「意味を理解すること」「社会とかかわること」それぞれに難しさを感じており、それをルーチンと視覚的支援により、困難さを軽減していく。

言葉を用いたルーチンは、定着しやすく、効果も大きい。ちょっと大きめに、「1・2・3おしまい!」「よ〜い、どん!」など毎回、同じ声かけをすることで、その言葉の後には、何かが起きることへの期待感が強まり、注目させやすくなる。また、これは、言葉を通じた、人とのかかわりともいえる。

好きなもの、好きな現象を使って、その面白さを人と共有することで、「共感」を持つことへの練習に発展させることができるのである（ジョイントアテンション）。まずは、自分が好きなものを指さすことから、練習が必要となる。

3 人とのかかわりを育む

成長とともに、本人も変化するが、周囲も変化していることを忘れてはならない。本人に向けたトレーニングを行い、本人の社会性を高めても、周囲も成長とともに変化しているため、その目標は常に変動している。特に、思春期以降は、人のかかわりもより洗練される。中には、困っているASDの子を支援したいと思い始める子もいるため、その関わり方をうまくコーディネートすることも求められるのである。

人とのかかわりを強めるためにも、「好きなもの」を活用していくのだが、共通の興味関心を活用した共同作業やルールのあるゲームなどの効果が大きい。その実践には、視覚的支援が欠かせないのは言うまでもない。特に重要なのは、「終わり」を明確にすることである。

興味をもとに構築する興味の分かち合いは、継続したかかわりに発展しやすい。食べ物やスポーツイベントなどが共通の興味であれば、ASDの人の方から、他人をその場に連れ出す（スポーツ大会観戦に誘う・食事に誘うなど）というかかわりに発展させやすい。その誘い方について、トレーニングし、どのような言葉づかいで臨むのかまで教える。年齢や性別によって、一般的に好ましくない言葉なども教え、年齢相当の社会性を身につけることが可能となる。

これらの人の関わり方のトレーニングが単発的なもので終わるのではなく、継続し、さらにネットワーク化し、生涯にわたって持続可能な交流ネットワークとなるようシステム化していくことが今後の課題である。TEACCHセンターでは、友達リストを作って、自分の友達を明確に把握しておくことや、特定の日に友達を招待する練習を行い、自ら人とのかかわりを持つことを意識している。そして、その活動を継続させることで、コミュニケーショングループとして、人とのかかわりが持続する仕組みを構築している。また、グループ間の交流ネットワーク化も進めている。

4 発達障害児支援サークル「のびのび」の活動へのヒント

発達障害児支援サークル「のびのび」の定例活動では、工作など大人と子どもが一緒に

楽しみながら、作業を進めている。「工作」という行為を通じて、部品の交換やお互いの作業の進み具合など話題を共有していることは、「人とのかかわり」が持っており、コミュニケーションのトレーニング効果もあるといえる。

誰も好きなほど使えるように部材を用意することも大切だが、わざと不足する環境を作り、お互い譲り合いというスキルの練習にもなるとのことだった。実際、予算不足のときは十分な部材を用意できないこともあるので、自然に、そのようなスキルアップの場にもなっていた。しかし、この場合、自分の好きな部材を手にすることができずパニックにつながることもあるため、代替策を用意するなど、事前の準備は欠かせない。

また、集団活動のため、全員の共通した興味関心で活動を構成することは困難である。好きではない活動のときは、参加しない・途中で離脱など柔軟な対応が求められる。不参加への対応は簡単だが、中途離脱は、途中まで作業を進めているので、最後までやらせようとしてしまいがちだが、今後は、その子がどの程度までなら可能なか確認し、途中までは、親や支援者が作業を進め、最後の完成工程だけを自分で行い成功体験で終わらせるなどの工夫が必要であろう。

発達障害児支援サークル「のびのび」の定例活動は、大人と子ども・子どもと子ども・大人と大人など様々なパターンのコミュニケーショングループといえる。活動日では、活動メニューを通じた話題を共有し、コミュニケーションを楽しみながら、その日の活動を終えている。何の変哲もない活動に見えるが、実は、ここに、子ども達の人とのかかわりたいという気持ちを満たし、社会性を高めていることに、今回の講義で気付くことができた。

今後も、家族という単位に一部の理解者を含めた活動となるが、発達障害児支援サークル「のびのび」は、療育を目的とする専門的な団体ではなく、共通の興味を基に、親子や仲間と一緒に活動を楽しむための場でありたいと思う。これらの活動は、コミュニケーションを楽しみ、人とのかかわりの糸口を体験することができる場として定着しており、今後も肩に力を入れずに、単純に「親子・仲間で楽しい時間を過ごす」ということ大切に活動が継続できれば、その存在価値は大いにあると感じる。